

まで・までに

——辞苑閑話・十一——

工藤力男

よろづよ

萬葉集を学び始めてまもなくぶつかった、ちよつと気がかりな表現に「よろづよ」がある。この語を含む短歌一首を、結句にだけ原文を残して岩波文庫版で掲げておく。なお、歌末の括弧書きの数字は旧『国歌大観』の歌番号である。

- (1) 馬並めて今日我が見つる住吉の岸の黄土を於万世  
すみのえ 見 (1148)

難波の「住吉」は、海岸の土の色が特徴的な地で、奈良びとたちは憧れをこめて詠むことが多かった、(1)は、その地をのちのちも見たいと願う歌である。

次に掲げる(2)の歌にも、それに似た表現がなされている。

- (2) 我が紐を妹が手もちて結八川またかへり見む万代  
ゆふやがほ までに (114)

初二句は「結ふ」の同音による序詞で「結八川」を導く。第四句と結句は倒置表現である。

右の二首の歌の「万代に」「万代までに」を、岩波文庫版ではともに「いついつまでも」と現代語訳している。つまり、「万代」自体が永久の時間を意味する語で、「まで」は不要と考えられるのに、「万代まで」「万代までに」と同義扱いなのである。

萬葉集での用例数は、「万代に」が三十五、「万代までに」が六つのほか、大伴家持の長歌「立山の賦一首」(400)の終り近くに、「万代の 語らひぐさと いまだ見ぬ 人にも告げむ云々」もあって、連体修飾句中での使用である。この句は岩波文庫版で「遠い世までの」と現代語訳されている。

『時代別国語大辞典上代編』の助詞「まで」の項で、①と②に分けて書かれている記述の要点は次のとおりである。

- ①文中にあって体言あるいは用言の連体形(東歌では終止形)に接し、動作・状態の及ぶ限度をあらわす。副詞語尾相当のニを分出したマデニの形についても同じ。

②文中にあって用言の連体形に接し、動作・状態の程度を極限的にあらわす。マデニについても同じ。

そして、【考】には、「上代では、マデ・マデニ両形が伯仲し、云々」の記述も添えている。つまり、「まで」と「までに」には差がないと解釈できる記述なのである。

本稿は、萬葉歌に関する議論が目的ではないが、いまましその周辺を探ってみる。

## 古代語の副助詞

「万代までに」に用いられた助詞「まで」は、古代語としては副助詞に分類される。これは時とともに少しずつ変化して現代まで用いられてきた。ここではその副助詞について考えよう。

『岩波古語辞典』は「基本助詞解説」で、「まで・ばかりのみ・さへ・など・だに・すら・そ・しも・づつ」、十個の副助詞に言及している。副助詞は一般に、格に関係せず、格助詞に上接し、時には下接することができる。

当面の課題である副助詞「まで」については、萬葉集の表記から興味ぶかい変化の過程を知ることができる。以下の三例は「まで」の原文を括弧書きして掲げる。

- (3) 雁がねの来鳴かむ日まで (及) 見つつあらむこの萩原に雨な降りそね (2097)
- (4) 御立たしの鳥をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで (左右) (180)
- (5) 大宮の内まで (二手) 聞こゆ網引すと網子ととのふる海人の呼びこゑ (2336)

(3)は漢字「及」の語義を生かした表記、(4)「左右」と(5)「二手」は、ともに両手を意味する和語の漢字表記によっ

たと解釈されている。この(4)(5)のたぐいの表記はなお多い。

古代日本語では、「かたて」(片手・隻手)に対して両手を「まで」と言ったことは確実であった(当初、テは清音のマテであったろうが)。そこから、両手を横に伸ばして拡げ、その動作の極限の状態を、名詞「まで」と言ったのだろうと考えられている。このように、副助詞「まで」は発達途上にあつたらしい。それが萬葉歌で「に」が付いたり付かなかつたりする原因なのだろう。(厳密には「手」ではなく「腕」と言うべきだろうが、古来、日本人は手と腕を厳密には分けないことが多いので、ここでもそこは無視して書いた)。

右の推論は、古代語の他の副助詞にも適用できるようなのである。例えば、「さへ」「添へ」からの音転と転成、「など」は「何と」からの約音と転成によって成立したと考えられている。「のみ」の成立過程の説明は難しく、「の身」からの転成とする説が有力だと思いが、断定できる段階には至っていない。「まで」以外の副助詞の若干の実例を見よう。

初めに「さへ」「さへに」について、「まで」同様に原文を括弧書きする。

(6) 天雲のよそに見しより我妹子に心も身さへ(副)  
寄りにしものを(547)

(7) 能登川の水底さへに(并尔)照るまでに三笠の山  
は咲きにけるかも(1861)

「さへ」に当てた表意文字表記は、右の(6)「副」・(7)「并」のほか「共」もある。

極端な事態を示して他の事態を類推させる機能をもつ副助詞に「すら」があり、現代語の「さえ」に相当すると言われる。萬葉集で廿八の用例があるが、右に見た「まで」「さへ」ほどには由来が明快でない。

(8) 言問はぬ木すら(尚)妹と兄ありといふをただ独  
り子にあるが苦しむ(1007)

(12) 軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに(尚尔)玉藻の上  
に独り寝なくに(390)

音仮名表記「須良」の八例以外は、右のように漢字「尚」で書かれている。そこに、この語性や由来を解く鍵があると思うのだが、まだ断定するには至らない。

とまれ、萬葉集に見たこれら副助詞の用例には、(1)「万代に」と(2)「万代までに」、(7)「身さへ」と(8)「水底さへに」、(10)「我すら」と(12)「鴨すらに」というように、「に」

のつかない副助詞と、「に」のついた副助詞が同じように機能していたことが知られるのである。

### 気象情報の報道から

話題をかえる。

わたしの日常生活では午後十一前には就寝するようにしているが、体調によってそれが少し早まることもある。そうした夜は、タイマーをセットして、微音量のラジオ放送やCDによる音楽で過ごすのが普通である。

ことしの二月下旬のことであった。十一時前の五分間、名古屋放送局から東海北陸地方のニュースと気象情報が伝えられた。その中に、「○○までにX、○○までにY、○○までにZ、」といったアナウンスがあった。何しろ睡眠モードの朦朧状態で捉えた音声なので、我が記憶は不正確なことこの上ない。だが、「○○」は時刻、X・Y・Zは天候や波の高さや風の強さであったと思う。

その翌日の夜だったか、二日後だったか、やはり早めに床に就いてまたその番組を耳にした。たまたま名を知っている男性アナウンサーの声が気象情報も伝え、この時も「○○までにX、」式の報道がなされたのである。まさか二

度も聞くことになろうとは思わなかったので、書きとめることもせず眠りに落ちた。

このことを、岐阜・日本語教育研究会の三月例会で話題にしてみたが、それを耳にした人はなく、己れの僻耳かもしれない、といささか情けない思いがした。しかし、二度あったことが三度あった。三月も末に近いある夜、同じ時間に、今度は女性アナウンサーの声で、「○○までにX、」が流れたのである。

本稿を着想した五月初めには、書き留めるべく、睡眠モードに入らないうちに聴くように努めた。だが、皮肉なことに、この態勢で待機してからは、そのたぐいのアナウンスに接することはない。そして、わたしの就寝時の習慣も気ままなものに戻ってしまった。

### 北京の大平学校で

前節に小さな経験を記したのは、三十六年前に北京で耳にしたことの記憶ゆえである。

日本の国際交流基金によって北京語言学院に開設された「在中国日本語教師研修センター」（中国名「日本語教師培训班」）は、計画の決断者・大平正芳首相を記念する意味で

「大平学校」の愛称でも呼ばれた。この計画は五期にわたって実施され、中国全土の大学や専門学校で日本語を講じている先生方を、一期につき百二十人ずつ招き、一年間日本語を学び直す手助けをした。学年は秋に始まり、春節休暇中に一ヶ月の日本研修旅行が組みこまれた。

第二期の春学期（19824～19827）に派遣されたわたしは日本語文法を担当した。そこでは、中国側のみなさん、日本側の佐治圭三主任以下、長期滞在の若い講師陣に助けられて、新鮮な刺激を受けながら充実した日々を過ごした。その若い人たち（いずれも中国語学の研究者）との談話で得た忘れがたいことの一つに、助詞「まで」に関わる問題がある。

研修生にはよく課題が与えられた。例えば月曜日に課題を与えて、「金曜日までに提出するように」などと指示することになる。それに対して彼らは金曜日に提出するのが一般で、木曜日以前に提出することはほとんどなかったという。そこで講師たちは、「金曜日の前なら木曜でも水曜でも、あるいはもっと早くてもいい」旨を付け加えるように配慮したのだという。

この逸話は、助詞「までに」の理解の難しさが関与して

いる、中国人研修生には「まで」と「までに」の違いが理解しにくかったのだ、とわたしは解釈した。彼らにとつて「金曜日までに」は「金曜日に」と同義だったことになる。これは、「まで」の無意味化にはかならない。萬葉歌において、「まで」と「までに」とに実質的な差がなく、やがて「に」が脱落していった過程と似ている、わたしは勝手にそう解釈した。

わたしは、廿代半ばから半世紀近く、高等学校と大学で国語の教師をした。だが、この二つの表現の差については、考えたことも話したこともなかったと思う。日本語を母語として育った者には分かりきったことだと解釈し、外国人の日本語習得の難しさの一面を知ったつもりであった。ラジオの気象情報を耳にして、このことを改めて考える気になったのである。

蛇足ながら、ひとつ動詞でも「まで」と「までに」によつてアスペクトの異なりうることを示そう。

その作品は月末まで書きます。（書き続ける）意

その作品は月末までに書きます。（書き終える）意

## 日中辞典の記述から

次になすべきは、前節に記した自分の解釈に根拠を与え  
ることである。だが、中国語学の素人であるわたしにでき  
ることはほとんどない。

まず机辺の『岩波日中辞典』(1983)で「まで」の項を探  
した。すると、「・まで」の見出しのもとに、1〔時〕、2  
〔場所〕、3〔範囲・程度〕に分けて書かれている。対応す  
る中国語は、1と2は「到・至」、3は「到」となってい  
る。大平学校での逸話は1〔時〕に関わること言うまでも  
ない。そして「・までに」は立項されていないのである。

辞書一点だけでは心細いので、岐阜市立図書館へ足を運  
んだ。三省堂の『クラウン日中辞典』(2010)を見ると、  
その記述は岩波の辞典にほぼ同じで、「までに」はない。  
やっぱり自分の予想どおりだ、と喜んだ。

次に小学館の『日中辞典 第二版』(2002)を開くと事情  
が違った。この辞典は、「まで」【迄】とは別に「までに」  
【迄に】も立項しているのである。記述は1〔期限〕と2  
〔程度〕に分かれており、1は、

〔……を期限とする〕「到」 dào…… (為止 wéizhǐ) ;  
〔……以前に〕在 zài……以前 yǐqián

などの記事と、例文が四点掲げている。中国語にも、日本  
語の「までに」に相当する表現があったのである。

そこで、初めの二辞典に戻って検索すると、「までに」  
のかわりに「以前」を立項していた。これは名詞なので、  
助詞「・まで」とは異なる扱いになったようである。

わたしは愛知大学現代中国学部の劉柏林教授を訪ねて教  
示を仰いだ。劉氏は、わたしが出講した第二期、大平学校  
の事務室詰めの先生であった。劉氏による結論は、研修生  
が「までに」を誤解したのではなく、提出ぎりぎりまで内  
容を吟味した結果であろう、とのことであった。

かくて、わたしの予想は崩れ、糠喜びに終わったのである  
が、劉氏の教示のおかげで恥を書かずに済んだ。以上、我  
が失敗談の顛末である。

## まで・までに

本稿と直接には関わらないことであるが、我が日常生活  
の多くの時間は失せ物さがしに費やされている。前々節に  
書いたように、本稿の執筆を思いついた五月、「〇〇まで  
にX」は既に耳にせず、あれはまさしく僻耳であったのだ  
と悟り、己れの老耄ぶりを情けなく思っつて鬱々と過した

た。

七月初旬のこと、例のごとく探し物をして、机の引き出しから取り出した私信のファイルに、名古屋大学名誉教授の田島毓堂いぐどう氏のものがあり、一枚めの朱引き箇所が目についた。昨年十月卅日づけのものであった。一読して三字の続きに朱を入れたのに、そのことを忘れさっていたのである。田島氏の諒解を得て、朱引きを傍線にかえて引く。

最近私が気になっていきますのは、天気予報等で「波の高さは午後二時までに3メートル」などという「まだに」です。「まだ」ではないのですが、その後どうなるのが気になってしまいます。初めのうちは、言い間違いかと思っていました、そうでもないようです。

田島氏は名古屋市にお住まいだから、岐阜市に住むわたしと同じ名古屋放送局の天気予報等を指すと考えていい。わたしの聞いた「まだに」は僻耳ではなかったのだ。しかも、田島氏はわたしより数ヶ月早く気づいたことになる。「貴重な証言が得られたわけである。

気象用語には一般の日本語とは少し異なることがある旨を書いたことがある（『気象の日本語―言語時評・九―』（『成

城文藝』193 2005.12 拙著「かなしき日本語」に再録）。だが、今回の「まだに」はそれとも違う。

この夏、超大型の台風十号の影響で混乱した交通網は、帰省先や旅行先から戻る人たちを大いに困惑させた。それについて、八月十六日金曜日の正午、東京からのラジオのニュースで、「混雑は今週いつばいまで続くでしょう」と報ぜられた。わたしの語感では、ここの「まだ」は要らな

(2019.9.20)